

親の立場から：母親の立場から

From the Parents' Perspective: the Mother

鈴木 玲子 SUZUKI, Leiko

まず自己紹介いたしますと、私は三鷹市内にある事務機メーカーに勤める会社員です。大学卒業後からずっと同じ会社におりまして、自動車販売会社に勤める夫と、小学校2年生と2歳の娘がおります。上の子は生後8ヶ月の4月から、下の子は産休明けから市内の無認可保育園に預け、その保育園は就学1年前で卒園なので、上の子は最後の1年は三鷹市立の保育園に行きました。

子供を保育園に預けはじめる前、私には漠然とした不安がありました。それは、私自身は幼稚園から小学校に上がったので、我が子が教育機関としての幼稚園を経験しないで、保育施設である保育園だけで、就学までに必要な知識等が身につくだろうかということでした。しかし落ち着いて考えれば、幼稚園のようにきちんと文字や数字を学習することはなくても、持ち物についている名前や、教室の入り口の「〇〇組」の札など、集団で暮らせばある程度文字というものを理解するだろう、1から10くらいの数字の概念はわかるようになるだろうと思ったので、どうしても足りなければ自分たち親が自宅で補えばよいつもりでございました。実際、上の子は、特に家で教えなくても入学までには大部分のひらがなが読め、自分の名前くらいは書けるようになっていましたし、いざ小学校に上がってみると、国語の授業1時間で1文字ずつのゆっくりペースで1学期いっぱいかけて、ひらがなの読み書きを習っていましたので、逆にもう全部読み書きのできているお子さんには、退屈だったのではないかと心配になるほどでした。

私の母親は公立中学校の教師の仕事をしていた

ため、私自身も結婚・出産しても仕事をやめるという選択肢はまったく考えておりませんでした。夫も自分の母親が働いていたので、共働きがどういものかを体験としてわかっておりましたし、私のそういう考えや性格をよく理解してくれているので、我が家ははじめから「結婚して、子供をもうけ、仕事は続ける」という基本的なライフプランがあって、「ではそのためにはどうすればいいか」を二人で考えていけばよいので、いろいろ迷わなくてもよい分、ある意味、楽だったと思います。

よく子供を預けて働きに出ることに罪悪感を感じる母親がいますが、必ずしもそんなに悪いことではないと思います。むしろ未熟な母親一人だけよりも、ベテランの保母先生やご近所の方など、たくさんの手に我が子を育ててもらえるチャンスかもしれません。それに、よく思い出すのですが、子供の頃、友達の家遊びに行ったとき、そこのお母さんに必ずというほど言われた言葉が、「そう、お母さん働いているの。じゃあさびしいでしょう？」でした。子供心になにか期待されているものを感じた私は、いつも反射的に「うん」と答えていましたが、実はさびしいと思ったことは、記憶の限り一度もありませんでした。なぜなら赤ちゃんの頃からよい預け先に恵まれ、中学生くらいまで近所に家の鍵を預けられるお宅があり、なにかあればそこへ行けばよいという環境を、母が必ず用意してくれていたからなのです。子供というのは、親と離れて物理的にひとりぼっちであっても、心までひとりぼっちでなければ、あまりさ

びしいとは思わないものなのです。

もちろんそれも、よい預け先があつての話です。今になってよくわかることですが、母も私も、よい預け先にめぐりあえたことは、とても幸運なことだったと思います。我が子が安全で清潔な場所で幸せに過ごせなければ、母親は安心して外に出られませんから。

さて保育園というところは、親の会社より厳しい「サル山の序列」の社会です。子供たちは子供たちなりの社会でしっかり揉まれ、順番や公平さ、我慢や思いやりといった人間社会の最も基本となるルールを体で覚えます。「噛まれたら痛い」というのも大事な経験です。そういう意味では、読み書きなど学校へ入ってからでも間にあうものと違って、物心つくのと同時にそういったルールを身につけているということは、よく園長先生がおっしゃっていた「人としてのよい根っこをつける」ということなのだと思います。

まだ上の子がやっと歩けるようになった頃、保育園である行事があり、会場に着いて抱っこを降ろしたとたんに、我が子がすたすたと歩いていて、親の私が全く知らないお友達と遊び始めているのを見て、ある種のショックを感じたことがありました。ほんの1歳か2歳の子供です。普通なら母親がその子のすべてを掌握していると思われるのに、我が子には私の全く知らない社会があることを目の当たりにしたのですから……。しかし落ち着いて考えれば、私が夫の会社の同僚のことを知らないのと同じことなのです。

幼稚園の子は、あるときから園服を着、かばんをさげて、ある意味、親と決別して幼稚園に入ります。なので社会的にはまだまだ「幼稚」ですが、親の庇護から一歩踏み出た「おとな」です。反面、保育園の子は、本人が気がついたときには保育園児になっていますから、すでにいっばしの「社会人」でありながら、どこかで区切りがなかった分いつまでも「赤ちゃんの延長」であるような気がします。どちらが良いとか悪いとかでなく、上の子が小学校に上がってみて、「ああ、違うものなんだなあ」と思いました。

さて、保育園では年間を通じてさまざまな行

事がありますが、我が子が通った保育園では、そのようなときには父親も母親も参加して、それぞれの得意分野で役割を果たしています。そんな機会を通じて互いに親しくなり、卒園後も家族ぐるみのおつきあいをしている方々も少なくありません。子供が同じ保育園でなければ、出会うことのないような様々な職業、年齢のご夫婦たちと、励ましあい教えあい助け合えることで、どんなに心強かったか……。それも母親よりもむしろ父親の方が、日頃、子育てのことなど職場では話せなくて、案外、孤独ですから、仲間に出会えて、もう楽しくて楽しくてどっぷりと浸かってしまっています。そうして親同士仲良くなれば、また次の行事にもっと積極的に関わっていくようになります。なにより子供たちに幼いうちから父親母親たち男女が仲良く協力して働いたり遊んだりする姿を見せることは、これからの男女平等社会を担う彼らに、なよりの教育だと思います。

子供が小学校へ入学し、学童保育所に通うようになる、ますますいろいろな家庭の人が集まってくる、特に親の方はおつきあいも難しくなりがちです。まして、母親がフルタイムで働いては、保護者会の出席もままならないと思いますが、そこはがんばって低学年のうちだけでもできるだけクラスや学童保育所の会合には出席して、先生や親御さんたちと親しくしておくことをおすすめます。学童保育所を卒所する4年生以降は、そういうまわりの大人が頼りなのです。なにかあったら電話で教えてもらえるような親しい方がいれば心強いし、先生と親たちの連絡が密であれば、子供たち同士もそうそう悪いようにはならないと思います。

以上のことを私なりにまとめますと、就学前の子供に必要な教育は、もちろん読み書きなども覚えるに越したことはありませんが、それ以上に同じ年頃の子供の集団の中でもまれて、子供なりに社会ルールを身に付け、喜怒哀楽を経験することのほうが、大切に思えます。まわりの大人たちがなるべく大勢で、それを見守ってあげられれば、子供たちは安心してのびのびと育っていただけるでしょう。そして家庭の中では、共働きでなくて

もそうですが、両親がそれぞれの一社会人としての人生と、夫婦というユニットとしての将来の両方を尊重しながら、力をあわせて家庭を築いている姿を、小さいうちから折に触れ子供に見せることで、たとえそれがお手本となるようなカッコいいものでなくても、子供の心の中には、しっかりと残るものがあるのではないかと思います。